

8月3日に東北（岩手・一関）で初開催！ 第6回「BIKE LOVE FORUM」見どころ

8月3日（金）岩手県一関市で「第6回 BIKE LOVE FORUM in 岩手・一関」が開催される。経済産業省の担当官は、「開催地の行政機関や住民にバイクを知ってもらう絶好の機会」と期待。自工会担当者は、「バイクの新規需要、既存需要についてバランスよく考える BLF にしたい」と表明。当日は二輪専門誌編集長らがバイク文化振興に向け、意見やアイデアを発言しあう。

経済産業省や自治体、二輪車関係団体が共同で行っている「BIKE LOVE FORUM^{注1}」（BLF）が、今年第6回を迎え、8月3日（金）に初めて東北地方で開催される。会場は一関市「ベリーノホテル一関」で、12時45分～17時30までの予定で開かれる。



昨年の BIKE LOVE FORUM

初開催から5年を経て、これからのBLFには何が求められ、どのような方向へと進むのか、関係者に話を聞いた。また、当日のプログラムを先取りし、パネルディスカッションやトーク対談の出演者に当日予定の発言内容を探った。“ネタバレ”ギリギリの情報を紹介する。

*注1：世界に通用する素晴らしいバイク文化の創造とバイク産業の振興、市場の発展を図ることを目的とし、バイクに関わる企業・団体・地方自治体等が核となり、バイクの将来像等に関して議論し活動するもの。

BLFメンバー：経済産業省、三重県、鈴鹿市、静岡県、浜松市、磐田市、熊本県、二輪車関係団体（日本自動車工業会、日本自動車部品工業会、全国オートバイ協同組合連合会、日本二輪車普及安全協会、日本自動車輸入組合、全国二輪車用品連合会、日本二輪車オークション協会、中古二輪自動車流通協会）

第1回：2013年9月 三重県鈴鹿市、第2回：2014年8月 静岡県浜松市、第3回：2015年9月 熊本県熊本市、第4回：2016年9月 兵庫県神戸市、第5回：2017年9月 群馬県前橋市で開催。

BLFのこれからの方向性は？

BLFは、日本のバイク文化と二輪車産業の発展を目指して、「官民一体となって真面目に議論しよう」というコンセプトで始まった。第1回から4回までは二輪車メーカーにゆかりのある都市で開催され、第5回は「三ない運動」^{注2}を廃止した群馬県、そして今回は初めて東北での開催が決まり、岩手県一関市で開かれることとなった。

一関市が選ばれたのは、全日本モトクロスが開催される「藤沢スポーツランド」があることや、ヘルメットメーカー「SHOEI」の生産工場があることも後押しとなっているが、岩手県や一関市が、東日本大震災からの復興と、地域の観光振興の一環としてBLFを歓迎してくれたことが大きい。



経済産業省・高橋課長補佐

経済産業省 製造産業局 自動車課の^{たかはしかずゆき}高橋一幸課長補佐は、「BLFは、二輪車関係団体の中で議論を深めることが主眼ですが、これを全国各地で開催することにより、開催地の行政機関や住民にバイクのことを知ってもらう絶好の機会となり、バイク文化の普及につながると考えています。開催地の地域振興にも貢献できれば、Win-Winの関係になります。今年はMFJ^{注3}が行う『東北復興応援ツーリング2018』や、一関市の『夏まつり磐井川花火大会』と連動して、8月3日を大いに盛り上げたい」と話す。

さらにこれからのBLFについて、「モビリティ産業自体が大きな構造変革を迎えつつあり、今後のBLFにおいては、海外の電動化の流れを踏まえて、日本の二輪車産業がどうあるべきかといった新しい視点も必要になってくると思います」と話し、将来的な課題についての議論にも関心を示している。

*注2：「バイクの免許を取らない、乗らない、買わない」の“三ない”を提唱して、高校生のバイク利用を禁止する運動。1980年代に全国的に普及。群馬県は2014年12月に県の交通安全条例を制定し、同県の「三ない運動」を廃止した。

*注3：一般財団法人日本モーターサイクルスポーツ協会の略称。

“新規と既存” 両方の需要拡大がカギ

一方、BLFの企画・運営に携わっている一般社団法人日本自動車工業会 二輪車特別委員会 二輪車企画部会は、今年度から部会長に^{かわせのぶあき}川瀬信昭が就任。BLFが掲げる課題や取り組みテーマに関しては、従来の取り組みを引き継ぎながら、さまざま意見にも耳を傾けていくという。

川瀬部会長は「これまでのBLFは、二輪車市場の活性化を図るため、とりわけ新規需要、若者需要の拡大に重きを置いてきました。そのための施策にも力を入れています。しかし、国内にはすでに1,100万台の二輪車保有があり、既存ユーザーをいかに大事にするか、このこともたい



自工会 川瀬企画部会長

へん重要です。今後のBLFの活動は、新規需要の掘り起しと、既存需要の維持・活性、それらをバランスよく進め、バイク文化の創造に結びつけることが大事だと考えています」と話す。

そうした方針に則って、今回のBLFは、さまざまなユーザーとの接点を豊富にもった二輪専門誌に注目した。人気バイク誌の責任者や編集長がステージに登場し、日本のバイク文化、市場の発展に必要なものは何か、意見やアイデアを語り合う。

パネルディスカッションとトーク対談に登場する出演者に接触し、当日予定している話題や発言について聞き出した。

●BIKE LOVE FORUMのプログラム・スケジュール

	時間	プログラム(予定)
	12:45~13:00	開催地のPR(観光名所、地元物産、その他) 一関市、岩手県から
	13:00~13:10	あいさつ: 1.経済産業省・自動車課長 2.岩手県・副知事
プログラム1	13:10~13:40	二輪車産業政策ロードマップ 進捗状況
	13:40~13:45	あいさつ: 3.一関市・市長
プログラム2	13:45~14:55	パネルディスカッション①「素晴らしいバイク文化の創造」 登壇者: 菅生雅文氏、斎藤純氏、MFJ、一関市および岩手県・関係者
	14:55~15:10	~休憩~
プログラム3	15:10~15:50	トーク対談「国内バイク市場の将来展望を語る」 登壇者: 合田英了氏、桒色博道氏
プログラム4	15:50~17:00	パネルディスカッション②「バイクユーザーを未来へ導く」 登壇者: 北村明弘氏、松下尚司氏、原田英里氏、宮城光氏
	17:00~17:15	~休憩~
	17:15~17:30	総評: 日本自動車工業会 二輪車特別委員会 委員長・日高祥博氏 次回自治体あいさつ 閉会あいさつ: 全国オートバイ協同組合連合会 会長・大村直幸氏



●菅生雅文(すごう・がもん)

『アウトライダー』編集長。1963年、岩手県生まれ。バイク誌のほか、旅行誌、教育機関誌にも寄稿。東北の被災地への継続的な関心を呼びかけている。

東北復興・ライダーにできることは何か

プログラム2・パネルディスカッション①には、ツーリング専門誌『アウトライダー』の編集長・菅生雅文さん、岩手県盛岡市在住の文芸作家・斎藤純さん、それにMFJ、一関市、岩手県からも出席が予定されており、「素晴らしいバイク文化の創造」(仮題)をテーマに話し合う。

じつは菅生さんも盛岡市の出身で、“東北愛”はことのほか大きい。2011年の東日本大震災から半年後、誌面を通じて全国のライダーに呼びかけ、福島県内で復興支援ミーティングを開催。このときは200人以上のライダーが駆けつけチャリティ活動などを行った。

一方、斎藤さんは、「岩手町立石神の丘美術館」の芸術監



●斎藤純 (さいとう・じゅん)

1957年、岩手県出身。文芸作家。
1994年、小説『ル・ジタン』が日本推理作家協会賞を受賞。バイクを題材にした『オートバイライフ』『風と旅とオートバイ』などの著作もある。

督を務めるなど、地元岩手への深い理解と大きな思いがある。震災直後には、盛岡市内に復興支援のボランティア拠点「SAVE IWATE」を立ち上げ、さらに「もりおか復興支援センター」の所長を務めるなど精力的に行動した。菅生さんとはライダー仲間であり、被災後の三陸沿岸を一緒にツーリングして現地の人たちと時間を共有し、さまざまな問題を肌身に感じてきた。

2人のこうした経験から、ステージでの話題は、「東北復興のためにライダーにできることは何か」といった話題が中心になりそう。

菅生さんは、「私は、被災地にバイクで行くということに、自問自答してきました。はたから見ればツーリングは遊びだし、バイクには支援物資もたいして積めないし、現地で使うお金もたかが知れています。バイクで被災地に行くことにどんな意味があるのかずっと考えてきました」と、心中を吐露する。

その言葉を斎藤さんはどう捉えるか、ライダーはどうやって地域の期待に応えるのか、当日のディスカッションを通じて答えを出すことになる。

需要を掘り起こす切り口はある

続くプログラム3・トーク対談は、「国内バイク市場の将来展望を語る」(仮)というテーマ。登壇するのは、自工会から委託を受けて「2017年度二輪車市場動向調査」(以下「市場調査」という)を実施した株式会社JMR生活総合研究所取締役の合田英了ごうだえいりょうさん。そして『RIDERS CLUB』誌をはじめ、さまざまな分野の趣味マガジンを発行している株式会社榎出版えいのむらひろみち社取締役の埜邑博道のむらひろみちさんの2人。

当日は、市場調査結果のポイントについて合田さんが紹介し、それを受けて埜邑さんがバイクユーザーの最新動向を解説。需要拡大のアイデアについて話し合うという。

合田さんは、「二輪車という商品は、潜在需要が大きいのが特徴なんです。つまり懂れている人は多いけれど、運転免



●合田英了 (ごうだ・えいりょう)

株式会社JMR生活総合研究所 取締役。
1971年、福岡県生まれ。若者の価値観や消費行動に関する調査経験が豊富。二輪車や四輪車の市場実態調査などを通じ、若年層とモビリティニーズの分析に取り組んでいる。

許が必要なので、実際にエントリーするところまでなかなか来ない。ほかにも、中古車ユーザー、レンタルバイクユーザー、過去に乗っていたユーザーも、新車購入の潜在需要層です。そうした需要を掘り起こすアプローチを具体的に考えていきたいですね」と話す。

一方、埜邑さんは、「ランニング、自転車、サーフィン、山登りなどいろいろな趣味マガジンがあるけれど、バイクだけは免許が必要。ハードルが高い趣味なんです。でもそれだけに、熱心なファンや読者が多いのが特徴。そこをいかに盛り上げていくかが大事」と、豊富な経験から指摘する。

2人が一致したのは、全国各地でバイクの楽しめる場をどんどん増やすこと。ツーリングやバイク祭り、バイクキャンプなど、バイクを使ったアウトドアイベントを広めることで、既存ユーザーのバイク利用頻度を増やし、新規需要も引っ張って来ることが期待できるという。

合田さんは、「先細りといわれていたほかの業界が、起死回生のヒットを出したケースもあります。当日はそうした事例も紹介したい」という。埜邑さんは、「バイクの需要を掘り起こすにはタッチポイントが重要。市場活性化のアイデアとして提案したい」と話す。埜邑さんのいうタッチポイントとは何か、この対談は見逃せない。



●埜邑博道 (のむら・ひろみち)
樫出版社 取締役。1958年、北海道生まれ。『BikeJIN』、『RIDERS CLUB』など編集長を歴任。SNSによる読者ネットワークやバイクイベントにも意欲的に取り組む。現在、媒体統括責任者。



●宮城光 (みやぎ・ひかる)
1962年、兵庫県生まれ。元GPライダーで、全日本および全米ロードレース選手権チャンピオン。鈴鹿8時間耐久レース監督、安全運転講話、トークショー司会など多方面で活躍中。

これだけは言わせて！ いま業界に必要な視点

プログラム4・パネルディスカッション②は、元GPライダーでモータージャーナリストでもある宮城^{みやぎ ひかる}光さんがモデレーターを務め、『オートバイ&RIDE』編集長の松下^{まつした ひさし}尚司さん、『ガールズバイカー』編集長の原田^{はらだ えり}英里さん、『タンデムスタイル』などを出版する株式会社クレタ社長の北村^{きたむらあきひろ}明広さんの4人が集まり、「バイクユーザーを未来へ導く」(仮)と題して、忌憚のない自由な意見をやりとりする。

松下さんは、「『オートバイ』は創刊96年なのですが、私が担当しているこの3年間もいろいろなチャレンジをしています。Webメディアの活用もそうですし、オートバイを擬人化した漫画などは、その世界観がなかなか伝わりづらいか

もしれないけれど、これまでとは違うユーザー層に広がっています。それをコスプレイヤーの女の子に“実写化”してもらったり。もちろんそれが“主たる『オートバイ』”ではないんですが、若者に共感される価値観っていうのはバイクのなかにまだまだあると思っています」と話す。

原田さんは、「女性ユーザーと接していると、本当にいろいろな驚きがあります。アメリカンバイクを買いに行ったのに、買ってきたのはスーパースポーツだったりとか（笑）。多くの女性はバイクの知識を持っていないし、あまり調べたこともしない。感性でやってしまう。ところが購入するとなったら決断は速いし、お金もケチらない。女性の感性はつかみどころが難しいけれど、需要としての可能性は大きいと思います」と話す。

北村さんは、「私がこの機会に訴えたいのは、クルマの普通免許で原付二種を運転できるようにすること。なんとしても実現させたい。それと、『ラブ・ジ・アース』という海岸清掃のイベントがあるんですが、けっこう高校生や大学生がバイクで来てくれて、嬉しくなります。大人のライダーが次の世代に伝えていく作業は大事ですね」と話す。

宮城さんは、「私が教えているライディングスクールの参加者は、レーシングスーツをビシッと着て、年齢は50歳以上です。いま40代もいない。若い人も大切だけど、こういう人たちをもっと大切にしないと！ 60歳、70歳まで乗ろうと思えばまだあと10年、20年はある。だったら新しいバイクを買いましょう。そしてもう1回レッスンしましょう。50代、60代のライダーの皆さんは、市場の大きなカギを握っているんです」と話した。

当日のディスカッションで、こうした意見が再現されるとは限らない。どの人も次々に刺激的な話題を繰り出して、展開の予想がつかないからだ。シナリオのないホットなトークにこそ、このプログラムの醍醐味がありそうだ。



●松下尚司（まつした・ひさし）
1974年、愛知県生まれ。『オートバイ』編集長。『オートバイ』と『RIDE』を抱き合わせた“Wマガジン”を実現。Web版「オートバイ & RIDE」にも力を入れている。



●原田英里（はらだ・えり）
1981年、兵庫県生まれ。「ガールズバイカー」編集長。オシャレに乗りたい女性を応援するため、編集スタッフは女性がメイン。女性に役立つ情報発信を行っている。



●北村明広（きたむら・あきひろ）
1965年、東京都生まれ。クレタ代表取締役。2000年に『タンデムスタイル』で出版事業開始。2002年からライダーによる環境活動「ラブ・ジ・アース」を展開。

BLF 翌日は「東北復興応援ツーリング」キックオフイベント

さて、BLF 翌日の8月4日（土）には、MFJ および東北応援の旅・ツーリング 2018 実行委員会が主催する「走ろう東北！ MFJ 東北復興応援ツーリング 2018」のキックオフイベント「BLF 岩手一関開催記念スペシャルステージ “平泉から奇跡の一本松”」が開催される。会場は一関市総合体育館「ユードーム」で、11時～12時30分までの実施を予定している。



東北復興応援ツーリング（昨年）

東北復興応援ツーリングは、東日本大震災で被災した東北沿岸部の復興をサポートすることを目的としたツーリング企画。4年目の開催となり、今年は8月1日（水）～8月31日（金）が開催期間。全国からより多くのライダーが東北へと足を運ぶことによって、現地の地域活性や観光活性の一助となることを意図した取り組みだ。

参加者は、ツーリングをしながら見つけたおススメのスポット、ルート、グルメ情報などを専用 Web サイトへ投稿。ライダーの視点ならではの東北の魅力を発信する。期間終了後には、Web への投稿内容やスタンプラリーのポイントなど、参加者それぞれの“貢献度”が審査され、最優秀東北復興応援ライダーが表彰される予定となっている。

キックオフイベントでは「出発セレモニー」のあと、一関の「祝い餅つき振舞隊」による餅つきや、ゲスト（冒険家・風間深志^{かざましんじ}さん、元 GP ライダー・宮城光さん、元モトクロス世界選手権ライダー・熱田孝高^{あつたよしたか}さん、全日本レディースモトクロスライダー・久保まな^{くぼ}さん）によるトークショーも開かれる。

さらに同期間中は、NEXCO 東日本と宮城県道路公社が、ETC 二輪車ツーリングプランの特別コース「バイクラブフォーラム一関スペシャルコース」を実施。BLF が開かれる一関はもちろん、八幡平^{はちまんたい}アスピーテライン、三陸海岸などのツーリングがお得に楽しめる。コース価格は9,500円。最大4日間、エリア内の高速道路が乗り降り自由となる。詳しくは、NEXCO 東日本 Web サイト「ドラ割」を参照。

■ 「ドラ割」：www.driveplaza.com/trip/drawari/

問い合わせ先	電話	URL
BIKE LOVE FORUM Web サイト		www.bikeloveforum.jp/
経済産業省 製造産業局 自動車課	03-3501-1511	www.meti.go.jp/
一般社団法人日本自動車工業会	03-5405-6119	www.jama.or.jp/
一般財団法人日本モーターサイクルスポーツ協会	03-5565-0900	www.mfj.or.jp/touring/